原　著

臨床教授等連絡協議会における交流会の成果報告

菊永　淳[1)]・清野由美子[1)]・青木　萩子[1)]・内山美枝子[1)]・成澤　幸子[1)]・成田　太一[1)]
板垣　広美[2)]・戸川　紀子[2)]・岡部　敦子[2)]・武樋　睦美[2)]・山田　民子[2)]

Key words：臨地実習指導，交流会成果，グループワーク，グループダイナミクス

要旨　本研究の目的は，臨床教授等連絡協議会・交流会の参加者に実施した質問紙調査の結果を分析し，その成果を明らかにすることである。

結果として，参加者に質問紙を63部配布し，その全てを回収した。評価項目の①雰囲気，②積極性，③意見交換，④相互理解，⑤役立つ情報，⑥有意義な時間で，4.23点～4.41点を得られた（５点満点）。また，グループワークで一番印象に残ったことについて，【良好な雰囲気と活発なコミュニケーション】，【学生の特性を踏まえた実習指導と関わり】，【実習指導と実習環境への共有と新たな気づき】，【実習指導に対する熱意の感受】，【指導者自身が看護師としての高い意識を持つことの大切さ】のコアカテゴリが抽出された。

考察として，参加者同士のグループダイナミクスが形成され，良好な雰囲気を生み出していたことが示唆された。また，指導者自身が看護師として高い意識を持ちながら，学生指導に当たることの重要性が示唆された。

Ⅰ．緒言

臨地実習は，机上で学んだ知識や技術，態度を統合し，看護の実践能力を習得するために不可欠であり，教員と臨地実習指導者の連携と目的意識の共有が重要とされている[1)]。このために，教育側と臨床側との連携やユニフィケーションなどの取り組みがなされているが，実習指導のための協働体制は十分とはいえず，看護基礎教育における課題となっている[2)]。

これまで，A大学実習専門委員会の教員は，臨地実習指導の充実を目指し，同大学病院看護部と連携しながら臨床教授等連絡協議会を開催してきた。しかし，従来は，一方向の受け身の教育講演会が主であったことから，看護学実習の充実のために臨床教授等と実習指導教員が双方向に情報交換できるような交流会の必要性を感じた。また，従来の講演会は，参加者が新たな知見を得ることに繋がっていたが，個々の臨地実習指導者が学生への指導で感じている悩みの共有や解決，実際の指導力向上までには至りにくいといった課題も挙げられていた。

そこで，平成26年度は‘学生の学び・変化の成長を支える’臨床教授等連絡協議会・交流会（以下，交流会）という内容で，学生の実習に関わる臨床教授等の交流の場となるような会を企画し，実施した。この交流会では，他施設の臨地実習指導者や管理者や教員が集うこともあり，グループダイナミクスの効果により，他部署や他施設での臨地実習指導の現状や困難感，対応策などを相互理解し共有する場となることが期待された。また，ディスカッションでの発言や傾聴を通して自己を振り返る機会ともなり，これらの成果が臨地実習指導に還元されていくものであると考えられた。

さらに，今回の交流会は，今までの講演会とは異なるものであり，実習専門委員会としても新たな取り組みであった。このような交流会を計画し，実施した成果をまとめ，報告することは，意義深いことだと考えられた。

本研究の目的は，臨床教授等連絡協議会の参加者を対象に行った質問紙調査の結果を分析し，グループ

１）新潟大学医学部保健学科
２）新潟大学医歯学総合病院
平成27年３月25日受理

ワークを通して得られた成果を明らかにすることである。研究の意義としては，臨地実習指導の在り方や今後の委員会活動を検討する際の基礎資料となると考えられる。

【用語の解説】

1）臨床教授等称号付与制度：A大学医学部保健学科が，文部科学省の21世紀医学・医療懇談会第一次報告書「21世紀の命と健康を守る医療人の育成をめざして」（平成8年）を受けて，大学以外の医療機関等の優れた人材が，医療現場の豊かな経験を踏まえ，医療人育成に参加，協力できる方策を目的に設立した制度。臨床現場における豊富な経験を有する優れた医療人に対して，一定の基準基づいて「臨床教授」等の称号を付与するもので，A大学病院をはじめA県内の実習病院，保健医療施設などの看護職・保健医療職に発令を行っている。

2）臨床教授等連絡協議会：臨地実習指導の充実のために，A大学医学部保健学科看護学専攻の実習委員がA大学病院の実習専門委員と連携し，臨床教授等に対して開催している会合のこと。

3）実習専門委員会：臨地実習指導の充実のために，A大学病院看護部の臨地実習委員とA大学医学部保健学科看護学専攻の実習委員との10名程度で構成された委員会である。

4）グループダイナミクス：集団力学。集団の構成員間に働く力をさぐり，集団内の志気の高揚を図る社会科学研究を指す。

5）アイスブレイキング：初対面の人同士が出会う時，その緊張をときほぐすための手法。集まった人を和ませ，コミュニケーションをとりやすい雰囲気を作り，そこに集まった目的の達成に積極的に関わってもらえるよう働きかける技術を指す。

Ⅱ．交流会プログラムの内容と実施，運営手続き

1．交流会のプログラム内容と工夫した点

今回の交流会を開催するにあたり，交流会の「雰囲気作り」を念頭に置いて，プログラムを作成した（**図1参照**）。その目標として，①互いの役職，立場を気にせずに，話しやすい環境を作ること，②交流会の雰囲気を楽しく，和やかなものへとすること，③活発な意見交換を行うために，参加者同士の良好なグループダイナミクスを形成することを挙げた。これらの目標を達成するために，以下の点に工夫して，交流会を実施した。

平成26年度看護学専攻
臨床教授等連絡協議会・交流会

交流会プログラム
“学生の学び・変化の成長を支える”臨床教授等交流会

ねらい：今回の交流会は、臨地実習指導者と教員が、学生の学びと変化の成長を支える実習指導を考えるための機会として設定しました。気楽な話し合いを通じて、今後の実習指導に役立てていくことを目的としています。

○グループでの自己紹介・ゲーム　(20分)
○オリエンテーション　(5分)
○テーマを1つ選び、テーマにそった話し合い　(60分)

テーマの例「実習での学生の学びや変化の成長を実感できたとき」
「学生の指導での達成感や課題」
「臨地実習指導者と教員の連携に関して」
その他（グループ内で決めたテーマ）

図1　臨床教授等連絡協議会・交流会プログラム

グループワークの方法

1. まず、グループ内で司会進行役、補佐役を決めましょう。
司会進行役の方は、グループでの話し合いの進行をお願いします。
補佐役の方は、司会進行役の方が円滑に進めるようにお手伝いをお願いします。
2. 次に、グループ内で話し合う実習指導に関するテーマを決めましょう。
事前に挙げられているテーマから決めてもよいですし、グループ内で話し合ってテーマを決めて頂いても結構です。
実習指導に関連する内容であれば、どのようなテーマでも構いません。

〈話し合いのテーマ一覧〉
① 「実習での学生の学びや変化の成長を実感できたとき」
② 「学生の指導での達成感や課題」
③ 「臨地実習指導者と実習教員の連携に関して」
④ その他（グループで話し合って決めたテーマ）

3. テーマを決めたら、模造紙の上に見やすいようにテーマを書きましょう。
4. 次に、個人ワークとして5～10分程度で、テーマに沿って考えたこと、感じていることを、ポストイットを使って、1つずつ内容を書きましょう。
ポストイットは何枚使っても、構いません。
5. 各自、個人ワークで書いたポストイットを、模造紙に張り出しましょう。
6. 司会の方を中心として、グループメンバー1人ずつ、自分のポストイットの内容を発表しましょう。
7. 一通り、グループ内で発表が終わったら、似ている内容をポストイットごとに、まとめてみましょう。
8. その中で、もっと詳しく話し合いたい内容について、話し合いましょう。
9. 終了10分前になりましたら、全体にアナウンスをします。
そのあと、グループ内での話し合いのまとめと、グループワークの感想を述べましょう。
10. グループメンバーで拍手をして、話し合いを終了しましょう。

＊ 話し合いでの時間配分や進行や休憩などは、グループ内でお任せします。

図2　グループワークの方法

1）グループ配置と人数

交流会参加者である実習指導者と大学教員を役職，部署，所属施設関係なく，1グループ6名程度になるように，ランダムに配置した。グループ人数を6名程度にしたねらいとして，緊張せずに話せ，グループワークでのまとまりに配慮した。

2）名札の提示方法

名札は動物のイラストがついたものを配布した。また，氏名を書くのではなく，ニックネームを記載して

もらった。

3）自己紹介とアイスブレイキング

アイスブレイキングの手法を用いて，自己紹介とイラストしりとりを行った。

まず自己紹介には「今，はまっているマイブーム」を交えて，30秒～１分程度で話してもらうように伝えた。次に，グループ内のゲームとして，「イラストしりとり」を行った。方法はメンバーがポストイットにイラストを書き，グループメンバー同士で当て合い，しりとりを行った。

4）グループワークの説明と内容

以下に沿って，グループワークの説明を行い，以下の流れでグループワークを実施した**（図２参照）**。交流会のグループワークは，実習指導に関するテーマをグループで決めて，60分ほど話し合った。

Ⅲ．方法

１．対象者

A大学臨床教授等連絡協議会・交流会の参加者63名（実習専門委員10名を除く）

２．調査期間

平成26年11月27日

３．調査方法

無記名による自記式質問紙調査

４．調査内容

1）対象者の背景：①性別②年齢③参加区分④看護師経験年数⑤臨地実習指導経験年数

2）企画について：①時期②開始時間④所要時間

3）グループワークで話し合ったテーマ

4）グループワークの成果：①参加しやすい雰囲気だったか（以下，雰囲気とする）②積極的に参加できたか（以下，積極性とする）③活発な意見交換ができたか（以下，意見交換とする）④相互理解が深まったか（以下，相互理解とする）⑤役立つ情報が得られたか（以下，役立つ情報とする）⑥有意義な時間を過ごせたか（以下，有意義な時間とする）

回答基準は，１．あてはまらない，２．ややあてはまらない，３．どちらでもない，４．あてはまる，５．非常にあてはまる の５段階回答とした。

5）グループワークで一番印象に残ったこと（20～40字程度で自由記載）

6）その他（交流会についての意見など）

５．データの分析方法

数値に関しては記述統計分析を行い，自由記載の内容は質的に分析を行った。質的研究の分析方法として，自由記載内容のコード化を行い，類似している内容でまとめた。次にコード化した内容からカテゴリを作り，さらにコアカテゴリを作成した。カテゴリ名やその内容の妥当性，信頼性を吟味するために，複数の研究者で検討を繰り返し実施した。

６．倫理的配慮

本研究は新潟大学医学部倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号2030）。

臨床教授等連絡協議会の受付時に次第と共に配布した質問紙に研究目的，倫理的配慮，研究成果の公表予定を記載し，文書を以て参加者に研究協力を依頼した。研究協力への同意は質問紙の回収をもって得られたこととした。アンケートにはできるだけ強制力が働かないように，アナウンスなどはせず，書面による説明のみで，参加者の自由意思に任せた。また，アンケートの回収率を上げる工夫としては，プログラムにアンケート記載の時間を設けた。終了後に会場の出口に回収ボックスを設置し，参加者の任意での回収を行った。

Ⅳ．結果

実習専門委員10名を除く参加者に63部の質問紙を配布し，63部を回収した。（回収率100％）

１．対象者の背景

性別は男性３名（4.8％），女性59名（93.7％），無回答１名（1.5％）。年齢は20代16名（25.4％），30代17名（27.0％），40代16名（25.4％），50代14名（22.2％）。参加区分は臨床教授12名（19.0％），臨床准教授６名（9.5％），臨床講師23名（36.5％），その他13名（20.6％），教員５名（7.9％），無回答４名（6.5％）。看護経験は平均15年８か月，実習指導経験は１年未満が最も多く21名（33.3％），次いで１～５年未満11名（17.5％），10～20年未満10名（15.9％），５～10年未満７名（11.1％）の順であった。参加回数は，平均1.62回であった**（表１参照）**。

２．企画について

開催時期，開催時間，所要時間については約98％以

表１　対象者の背景

n=63

項目			項目		
性別	男性	3	看護師経験年数	平均値	15年8か月
	女性	59		最小値	4年7か月
	無回答	1		最大値	37年7か月
年齢	20代	16			
	30代	17	実習指導経験年数	1年未満	21
	40代	16		1～5年未満	11
	50代	14		5～10年未満	7
参加区分	臨床講師	23		10～20年未満	10
	臨床准教授	6		20年以上	3
	臨床教授	12		不明・無回答	11
	大学教員	5			
	その他・不明	17			

上が「適切である」と回答していた。

３．グループワークで話し合ったテーマ

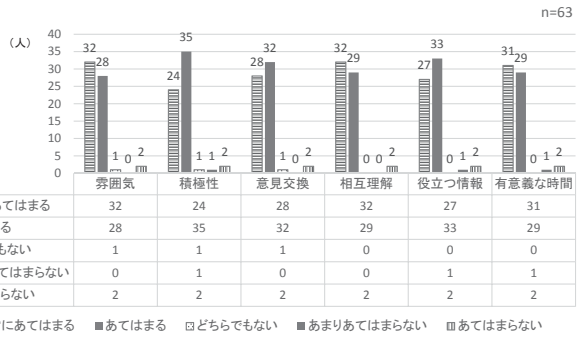
交流会では,13グループがそれぞれテーマを決めて,グループワークが行われた。

その内で,「学生指導での達成感と課題」が６グループと一番多く話し合われたテーマであった。次に,「臨床側の学生に対する思い」,「学生について感じていること」,「学生との関わりについて」,「学生との関わりについての困難さ」という学生の特性と関わり方についてのテーマが，４グループあった。また,「学生の成長を実感できたとき」,「実習での学生の学びや変化の成長を実感できたとき」が２グループ,「実習指導者と実習担当教員との連携」が１グループであった。

４．グループワークの成果

６項目それぞれに「あてはまらない」１点～「非常にあてはまる」５点として平均得点を算出し，単純集計を行った（**図３，表２参照**）。

図３　グループワークの成果



	雰囲気	積極性	意見交換	相互理解	役立つ情報	有意義な時間
非常にあてはまる	32	24	28	32	27	31
あてはまる	28	35	32	29	33	29
どちらでもない	1	1	1	0	0	0
あまりあてはまらない	0	1	0	0	1	1
あてはまらない	2	2	2	2	2	2

表２　グループワークの成果（得点）

n=63

	雰囲気	積極性	意見交換	相互理解	役立つ情報	有意義な時間
合計点	277	267	273	278	271	275
得点率	87.9	84.8	86.7	88.3	86.3	87.3
平均得点	4.39	4.23	4.33	4.41	4.3	4.36
標準偏差	0.81	0.83	0.8	0.79	0.83	0.84

以下，平均得点(標準偏差),「あてはまる」「非常にあてはまる」の割合を示す。①雰囲気：4.39点（±0.81），60名（95.2％），②積極性:4.23点（±0.83），59名（93.7％），③意見交換：4.33点（±0.80），60名（95.2％），④相互理解：4.41点（±0.79），61名（96.8％），⑤役立つ情報：4.3点（±0.83），60名（95.2％），⑥有意義な時間：4.36点（±0.84），60名（95.2％）であった。

５．グループワークで一番印象に残ったことの分類

１）分類方法

参加者からグループワークで一番印象に残ったことを20～40文字程度の自由記載欄を設けた。その分析として，得られた回答をコード化し，類似した内容をまとめて，分類した。次に，コード化した内容のカテゴリへと分類し，さらにコアカテゴリとして分類した**（表４参照）**。

２）データの妥当性

テーマの異なるグループワークから得られた回答を一括データとして分類する妥当性を確保するために，テーマごとに回答を分類し，内容の分析を行った。

テーマごとに分類したデータを分析した際に，以下の３点の内容が抽出された。

①交流会，グループワークで感じたこと，②テーマに関連した実習指導の学びや気づき，③自己や自施設での今後の取り組みや課題について

以上のことが，どのテーマの中にも含まれていた。この結果，テーマごとに関連した内容はみられるが，それぞれに共通している内容も含まれていることから，偏りは生じておらず，一括データとして処理する妥当性があると判断した。

３）分析結果

結果として，63名中60名からの回答が得られた。回答の中には，複数の記載があり，のべ64回答が挙げられた。分析では，コード化された類似の内容が35個に分類された。次に，それらを14個のカテゴリへと分類し，さらにコアカテゴリとして，５個に分類した。以下に，得られた結果を説明していく。文中で，【 】はコアカテゴリ名，[ ]はカテゴリ名を示す。

(1) 良好な雰囲気と活発なコミュニケーション

１つ目のコアカテゴリは【良好な雰囲気と活発なコミュニケーション】であり，構成するカテゴリは[アイスブレイキングで良好な雰囲気で話し合えた]，[他の指導者や教員と多くのコミュニケーションが図れた]であった。

参加者が良好な雰囲気の中でグループワークを進め

表３　グループワークで一番印象に残ったことについて

コアカテゴリ	カテゴリ	コード化してまとめた内容（類似した回答数）
良好な雰囲気と活発なコミュニケーション	アイスブレイキングで良好な雰囲気で話し合えた	始めのアイスブレイキングでグループのコミュニケーションが深まった(1)
		ざっくばらんな雰囲気で参加者と共感し合いながら、スムーズな話し合いができた(3)
	他の指導者や教員と多くのコミュニケーションが図れた	他の指導者や教員の意見や助言を聞くことができた(7)
		他の指導者や教員と多くの語りと意見交換ができた(5)
学生の特性を踏まえた実習指導と関わり	学生は情報収集能力は高いが、コミュニケーション能力が乏しく、実習意欲に個人差がある	最近の学生は素直で情報収集が得意である(2)
		学生は記録や調べ物ばかりしていて、患者さんのところへ行かない(1)
		最近の学生は生活経験が少なく、他者の気持ちを考えられない傾向や、コミュニケーションや実習意欲に個人差がある(2)
	指導者側から積極的に質問や考えを引き出す関わりが必要である	学生が患者とコミュニケーションが取れているかを確認しよう(1)
		学生に積極的に質問していこう(1)
		消極的な学生にはこちらから介入しよう(1)
		学生の立場を理解した関わりをしていこう(1)
		学生の気づきや考えを具体的に引き出す関わり方をしよう(2)
		学生とスタッフがお互いに声をかけやすいように関わりたい(1)
		学生に病院組織やマナーを説明することが必要(1)
	学生に目的意識を持たせることは困難である	学生に主体性と目標意識を持たせるのは難しい(1)
		学生に実習の目的を持たせて参加することが大切(1)
実習指導と実習環境への共有と新たな気づき	実習指導への有益な情報と異なる視点を得られた	他部署での有益な取り組みを聞けた(2)
		指導や学生との関わりに異なる視点が得られた(2)
		学生視点ではなく、実習システム視点の課題が多く出たことを反省したい(1)
	実習指導の状況や課題や学生への思いは共通していた	実習指導の状況や学生についての課題は共通していた(4)
		学生に多くの成功体験を経験し、意欲を持って実習に臨んで欲しい(1)
		指導者からの学生への願いや思いは同じである(2)
	実習指導や関わりの糸口が得られた	学生への関わりの糸口が見えた(1)
	実習環境についての課題が明らかになった	実習指導について職場に不足している点がわかった(1)
		職場環境が悪く、看護師、患者に負担感が強い(1)
実習指導に対する熱意の感受	指導者の熱意や前向きな取り組みを感じた	指導者の熱意を感じた(3)
		指導者が前向きに取り組んでいると印象を受けた(2)
		指導者の達成感が多く出されていた(1)
指導者自身が看護師としての高い意識を持つことの大切さ	病棟スタッフの関心を高め、協力を促す働きかけが大切である	病棟スタッフへの協力や、モチベーションを高める働きかけが大切(2)
		学生の指導効果を病棟スタッフへ伝え、関心を高める働きかけが大切(1)
		学生の長所と成長をスタッフとともに共有することが大切(1)
	指導者自身が看護師としての意識を持ち、やりがいを示すこと	看護師としての意識を持ち、学生に看護のやりがいをみせること(3)
	指導者もともに学び、成長する存在であること	指導者も成長する存在だと理解できたこと(1)
		学生を理解し、ともに学ぶ姿勢(1)
	教員と指導者の連携と密なコミュニケーションをとること	教員と指導者側との連携するために、コミュニケーションが重要である(3)

られたこと，参加者と共感し合いながらスムーズな話し合いができたこと，始めに行われた自己紹介やしりとりでグループのコミュニケーションが深まったという意見が見られた。また，他の指導者や教員から意見や助言を聞けたことや，他の指導者や教員と多くの語りと意見交換ができたことが挙げられていた。

これらの意見により，交流会の参加者の多くが良好な雰囲気の中で活発なコミュニケーションを行えたことが明らかになった。

(2) 学生の特性を踏まえた実習指導と関わり

２つ目のコアカテゴリは【学生の特性を踏まえた実習指導と関わり】であり，[学生は，情報収集能力は高いが，コミュニケーション能力が乏しく，実習意欲に個人差がある]，[指導者側から積極的に質問や考えを引き出す関わりが必要である]，[学生に目的意識を持たせることは困難である]のカテゴリで構成された。

参加者の印象に残った学生の特性として，学生は素直で情報収集は上手であるという意見と，生活力がなく，他者の気持ちを考えられない傾向や，コミュニケーション力や実習意欲に差があるという意見が挙げられていた。また，これらの学生の特性を踏まえた実習指導や関わり方が，多くの参加者から挙げられていた。具体的な意見として，患者とのコミュニケーションが取れているかを確認すること，実習の目的を意識的に持って参加させること，学生の気づきや考えを具体的に引き出す関わりなどがあった。また，学生に目的を持たせて実習に参加させることが大切ではあるが，目的意識を持たせる指導は困難であるという意見が見られた。

今回の交流会では，学生についての話し合いを行ったグループが多かったこともあり，参加者は学生の特性や学生視点を捉えた指導や関わりを見出していたことが明らかになった。

(3) 実習指導と実習環境への共有と新たな気づき

３つ目のコアカテゴリは【実習指導と実習環境への共有と新たな気づき】であり，構成するカテゴリは[実習指導への有益な情報と異なる視点を得られた]，[実習指導の状況や課題や学生への思いは共通していた]，[実習指導や関わりの糸口が得られた]，[実習環境についての課題が明らかになった]の４つであった。

グループワークで，実習の指導方法や状況や課題などの共有化がなされた結果，共通している点や異なる

視点を得られたという意見が多数見られた。このような共有を通じて，実習指導への糸口や課題に気づけたという参加者が見られた。また，他病棟や他施設の指導者と話し合う中で，実習環境についての課題が明らかになった参加者もいた。

このように交流会では，参加者が実習指導への共有と新たな気づきを得られたことが明らかになった。

(4) 実習指導に対する熱意の感受

４つ目のコアカテゴリは【実習指導に対する熱意の感受】であり，構成するカテゴリは[指導者の熱意や前向きな取り組みを感じた]であった。

指導者の熱意を感じた，指導者が前向きに取り組んでいる印象を受けた，指導者の達成感が多く出されていたという意見が挙げられた。これらの意見から，実習指導者と教員との相互理解を深めた参加者や，実習指導へのモチベーションを高めた参加者がいたことがわかった。

(5) 指導者自身が看護師としての高い意識を持つことの大切さ

最後のコアカテゴリは【指導者自身が看護師としての高い意識を持つことの大切さ】であった。[病棟スタッフの関心を高め，協力を促す働きかけが大切である]，[指導者自身が看護師としての意識を持ち，やりがいを示すこと]，[指導者もともに学び，成長する存在であること]，[教員と指導者の連携と密なコミュニケーションをとること]の４つのカテゴリで構成された。

まず，[病棟スタッフの関心を高め，協力を促す働きかけが大切である]では，実習指導を充実させるために病棟スタッフの協力を得ることや，学生の成長をスタッフと共に共有することが大切という意見が出されていた。

次に，[指導者自身が看護師としての意識を持ち，やりがいを示すこと]では，指導者自身が看護師としての意識を持ち，楽しく働き，学生に看護のやりがいをみせることが，実習指導に必要であるという意見が挙げられた。

さらに，[指導者もともに学び，成長する存在であること]では，指導者が学生とともに学ぶという姿勢を持ち，指導者も成長する存在であると理解できたという意見が見られた。そして，[教員と指導者の連携と密なコミュニケーションをとること]では，より良い実習指導を行なうためには，教員と指導者の連携と円滑なコミュニケーションが重要であるという意見が挙げられていた。

このように交流会を通じて，参加者は指導者自身が看護師としての高い意識を持ち，病棟スタッフや教員らと協力しながら，実習指導を行うことが重要であると感じていたことが明らかになった。

Ⅳ．考察

１）交流会の良好な雰囲気と活発なコミュニケーションが行われた要因

今回の交流会の重要な成果として，交流会の雰囲気と活発なコミュニケーションが行われていた。その要因の１つにそれぞれのグループダイナミクスが良好であったことが挙げられる。これは，参加者の質問調査の集計結果でもわかるように，交流会とグループの雰囲気の得点は4.39点であり，参加者の多くが良好なグループダイナミクスを経験していたと考えられる。では，なぜこのような結果が得られたか，その要因を考察していく。

(1) グループ編成の工夫

まず，要因の１つとして考えられるのが，交流会のグループ編成の工夫である。本研究のⅡ．交流会の内容と実施,運営手続きの項目でも述べているが,グループ編成は所属施設や役職や教員の区別なく，ランダム配置を行った。その理由は，普段関わりがほとんどない指導者や教員と実習について，多く意見交換ができるためである。また，話し合いがしやすい人数になるように,６名前後のグループを作成している。武井は,グループの大きさが相互交流の質に影響を与えるとし,６人程度の小グループでは，メンバー同士の同一化が進みやすく,親密な雰囲気が生じることを述べている[3)]。今回の６人程度の小グループは物理的，心理的にも適切な距離感が保て，話し合いを行うには適切な人数であったと言える。しかし，これだけの配慮だけでは，参加者同士が緊張して話せないことも想定された。そこで，アイスブレイキングの手法を交流会のプログラムに用いた。

(2) アイスブレイキングの効用

アイスブレイキングの手法や効果を研究している青木は，アイスブレイキングの必要性を「準備体操みたいなもの」といい，アイスブレイキングには，緊張を和らげること，お互いの理解を深める，チームワークを高める働きなどの役目があると述べている[4)]。今回の交流会では３つのアイスブレイキングを，それぞれの目的のもとに取り入れた。

１つ目のアイスブレイキングは動物のイラストのつ

いた名札に，参加者が呼ばれたい「ニックネーム」をつけてもらった。その目的は，可愛らしい動物で場を和ませることや，ニックネームによって，日頃の役職や上下関係に影響されることなく，発言できる環境を作ることや，参加者が互いに親しみを込めるということであった。

２つ目は自己紹介である。ただの自己紹介だけではなく，人となりがわかるように，「今はまっているマイブーム」を入れて，自己紹介してもらった。これにより，グループメンバーがどのような個性を持っているかが分かるように工夫した。

３つ目のアイスブレイキングはイラストしりとりである。イラストしりとりは，グループ対抗のゲームとして，グループメンバーの結束を高めるために行い，互いの緊張をほぐしてもらうねらいがあった。

このようなアイスブレイキングを実施したことによって，交流会の効果的な雰囲気作りがなされ，各グループの参加者同士の適切な関係性が構築されたのではないかと考えられる。これらの結果が，グループワークでの活発なコミュニケーションに繋がった要因であると思われる。

２）参加者がグループワークで得た成果とは

交流会のアンケート結果では，参加者の満足度が全体的に高いことが伺えた。ここでは，参加者がグループワークからどのような具体的成果を得ていたかを考察していく。

(1) グループで語り合うということ

グループワークで一番印象に残ったことで多かった意見は，他の指導者や教員と数多くのコミュニケーションが図れたというものだった。今回の交流会は，多くの指導者や教員たちが参加者自身の体験した内容をグループで共有し合い，参加者同士で実習指導についての現状や認識や課題について深められたことが特徴的であった。武井は，グループで自分を語るようになると，同じ体験をしている他者の存在に気づくことができ，他の人の話にも耳を傾けるようになるとし，さらに他の人の話を聞くことは，自分をさらに見つめなおすきっかけにもなると述べている[5]。このような相互作用を通じて，学生の特性や実習指導のあり方や実習指導への達成感や課題などについて，指導者同士がともに情報や認識を共有し，お互いの理解につながったと考えられる。

(2)「ピア・グループ」としての教育効果

今回の交流会では，参加者が実習指導という共通の話題で話し合えたことで，「ピア・グループ」としての教育的効果が見られたと考えられる。特に実習指導者同士という仲間（ピア）とともに，実習指導や実習環境の課題や困難さなどの表出や共有がなされ，参加者の「カタルシス」に繋がっていたと思われる[7]。さらに，ピア・グループでは，共通性や類似性を追求する共感的な雰囲気だけでなく，互いの異質性を認め合い，その違いを超えて理解し合おうとする雰囲気が存在すると言われる[8]。このような効果があり，相互理解が深まることや，実習指導や実習環境について，異なる視点や様々な意見が出され，新たな問題解決の糸口や課題の気づきに繋がったのではないだろうか。

(3) 指導者自身が看護師としての意識を持つことの大切さ

そして，今回の交流会での大きな成果は，参加者から指導者自身が看護師としての高い意識を持つことの大切さが挙げられたことである。今回の交流会のテーマは「学生の学び・変化の成長を支える」であったが，グループワークの過程で，指導者自身のあり方を見出していた参加者も複数見られた。

結果でも示したように，指導者も学生とともに学び，成長する存在であるという指導者の前向きな姿勢が見られた。田村らは，実習指導者と学生は共に成長するとし，絶えず相互成長できるものになるよう変容のプロセスを歩むことが必要であると述べている[8]。指導者が学生を理解しつつ，成長していくことで，学生への指導力が一層向上すると思われる。

また，看護師としての高い意識を持ち，看護のやりがいを示すという姿勢は，看護学生への「ロールモデル」に繋がると考えられる。杉森らは，学生は実習中に「模範の発見と同一化」を行っており，看護学実習場面におけるロールモデルの重要性を述べている[9]。ロールモデルとは，学生が共感し，同一性を試みる模範とすべき看護師像であり，学生が「あのような看護師になりたい」と思う対象である。学生のロールモデルとして，指導者が看護のやりがいをみせることは，学生の実習意欲を引き出すことや，キャリア形成や能力形成において重要になると考えられる。

このように交流会を通じて，学生指導のあり方だけでなく，実習指導者自身が看護師としての高い意識を持ちながら，成長するという気づきを複数の参加者が得られたことは大きな成果であると感じた。

３）アンケート評価の標準偏差について

今回の交流会のアンケート評価では，標準偏差が比較的大きい結果が見られた。アンケートの得点を低くつけた参加者の回答の中には，自施設の実習環境が悪

く，患者や看護師に負担が強いという内容が書かれており，今回の交流会の満足度は低く，指導に役立つ情報を得られなかったという意見が少数見られていた。阿久澤らの研究では，実習体制や環境によって指導者が困難感を抱えている現状を明らかにしている[10]。このように，実習施設の体制や環境の差によって，実習指導に対する熱心さややりがいに差が見られると考えられる。

また，参加者の中にはアンケート評価項目内で全てに「１．当てはまらない」と評価しているにも関わらず，自由回答欄には好意的な回答を示していたものが２件みられた。アンケート評価の付け間違えの可能性があると考えられたが，集計されたデータとして，その評価を結果に反映させている。そのため，全体的に標準偏差が大きくなったと考えられる。

４）交流会全体を通しての成果と今後の課題

(1) 交流会全体を通しての成果

今回の交流会は，従来の講演会に比べて参加者が能動的な話し合いができ，参加者の満足度も高くみられていたことが特徴的であった。ただ，受容的に講演を聴くのではなく，実習指導に関わる他の指導者や教員とともに，互いの体験や思いを語り，聴くことは，参加者自身の学びや気づき，振り返りと共有につながっていたと考えられる。酒井らも，臨地実習者講習会の中で実習指導での成功体験を共有しあうような，実習指導者と教員が共に学ぶグループワーク形式の研修を取り入れることの重要性を示唆していることからも，有意義な交流会であったと考えられる[11]。

今回の交流会では，指導者や教員たちと実習について語り合える場が提供でき，指導者自身のやる気，意欲向上になったことが大きな成果だと感じている。

(2) 今後の課題

今後の課題としては，臨床教授等連絡協議会を開催するに当たって，十分に臨地実習指導者の学習ニーズについて把握できていないという現状がある。今後は参加者の学習ニーズを把握した上で，今回のような交流会を発展させて継続していった方がよいか，講演会に戻し，参加者が希望するテーマを設定した方がよいかを，実習専門委員会で十分に検討していく必要があると考えられる。

Ⅴ．結論

１．臨床教授等連絡協議会・交流会の成果として，参加者から，評価項目の①雰囲気，②積極性，③意見交換，④相互理解，⑤役立つ情報，⑥有意義な時間で，4.23点～4.41点の高い評価が得られた。

２．グループワークで一番印象に残ったことについて，【良好な雰囲気と活発なコミュニケーション】，【学生の特性を踏まえた実習指導と関わり】，【実習指導と実習環境への共有と新たな気づき】，【実習指導に対する熱意の感受】，【指導者自身が看護師としての高い意識を持つことの大切さ】のコアカテゴリが抽出された。

３．交流会にアイスブレイキングを用いたことで，メンバー同士の関わりが良好になり，活発なコミュニケーションが行われたことが示唆された。

４．交流会では，実習指導者が実習指導の達成感や，その課題などを多く語り合う中で，互いに共有しつつ，学生指導のあり方を模索するだけでなく，指導者自身が看護師として高い意識を持つことの大切さを実感していたことが明らかになった。

Ⅵ．引用文献

１）文部科学省：大学における看護実践能力の育成の充実に向けての看護学教育の在り方に関する検討報告書，2002.
２）文部科学省：看護学教育の在り方に関する検討会，看護実践能力育成の充実に向けた大学卒業時の到達目標，2004.
３）武井麻子：「グループ」という方法．医学書院.2002, 東京, p48-49.
４）青木将幸:リラックスと集中を一瞬でつくるアイスブレイクベスト50．ほんの森出版．2013，東京.
５）武井麻子：「グループ」という方法．医学書院.2002, 東京, p108.
６）ヤーロム, A. D. & ヴィノグラードフ, S.川室優:グループサイコセラピー新装版．金剛出版．1997，東京.
７）武井麻子：「グループ」という方法．医学書院.2002, 東京, p141.
８）田村美子，白木智子，進藤美樹，他．看護学生が臨床指導者から受ける否定的ケアリング体験．看護教育，2004；45(9)：748－752.
９）杉森みど里，舟島なをみ：看護教育学第4版増補版．医学書院．2009，東京.
10）阿久澤智恵子，廣井寿美，古屋敦子，他．臨地実習における看護学教員と実習指導者に関する研究動向と課題．桐生大学紀要，24，2013.
11）酒井禎子，中澤紀代子，石田和子，他．看護学実習指導者が感じている指導上の困難と学習ニーズ．新潟県立看護大学紀要，4，2015.

Report on the outcome of the ”Liaison Council for Clinical PracticeTeachers and Communication Meeting”

Jun KIKUNAGA[1)], Yumiko SEINO[1)], Hagiko AOKI[1)], Mieko UCHIYAMA[1)],
Sachiko NARISAWA[1)], Taichi NARITA[1)], Hiromi ITAGAKI[2)], Noriko TOGAWA[2)]
Atsuko OKABE[2)], Mutsumi TAKEHI[2)], Tamiko YAMADA[2)]

1）School of Health Sciences, Niigata University
2）Niigata University Medical &Dental Hospital

Key words：clinical training instruction, outcome of communication meeting, group work, group dynamics

Abstract The purpose of this study was to clarify the outcome of the ”Liaison Council for Clinical Practice Teachers and Communication Meeting” with the topic of guidance of nursing students. We distributed a questionnaire survey to the 63 participants and all responded. Analysis of results showed scores of 4.23 ~ 4.41 points（perfect score, 5 points）for the following items that were evaluated: 1）atmosphere, 2）assertiveness of participants,3）exchange of opinions, 4） mutual understanding, 5）usefulness of information, and 6）use of valuable time. Also, we extracted core categories regarding the largest impressions of the work groups, such as ’good atmosphere and active communication’, ’practice guidance and involvement in light of the characteristics of the students’, ’practice guidance with shared information on new problems in the training environment’,’enthusiasm over training guidance’, and’the importance of the leader being highly conscious of the role of the nurse’. The results of this questionnaire indicated that a good atmosphere regarding the relationship among participants had been created group dynamics in the meeting. Also, these results suggest that it was important to train the leaders themselves to be highly conscious of the role of nursing.

Accepted：2015.3.25